

## 『ソクラテスの弁明』

### ■ 基本知識

- ① ソクラテスの生涯；参考資料参照
- ② ソクラテスに関する著書について；ソクラテス自身は本を残さなかったが、ソクラテスに関する重要な記述を残した者としては以下の三人が代表される。

#### [1] プラトン

ソクラテス 60 歳、プラトン 20 歳のときに出会う。詩の才能があった。プラトンの書く対話編は、初期(~40 歳)、中期(~60)、後期(~80)に分類できる。初期はソクラテスが主人公で、軽快かつ写実的な文章となっている。中期に入るとプラトン自身の思想が混じり始め、後期にはソクラテスが殆ど登場しなくなる。

#### [2] アリストパネス

ギリシャを代表する喜劇作家。ソクラテスと同時代の人で、よく知った間柄。『饗宴』では杯を交わす場面も。その著書『雲』において、ソクラテスをソフィストとして描き、そのことが『弁明』の中でも指摘されている(18D、19C)。

**『雲』概要** 借金をやり過ぎそうとした父親が、嫌がる息子に弁論術で有名なソクラテスの教育を受けさせたが、息子はついにはもっともな論理で正当化して父親を殴ったので、それに怒った父親がソクラテスの学校を焼き討ちにする。

#### [3] クセノポン

プラトンとほぼ同年輩の歴史家。ソクラテスの人柄や魂、本質を生き生きと描いたプラトンとは対照的に、クセノポンは歴史家ということもあって史実に基づいた記述をしている。道徳的、倫理的な側面も含まれる。代表作に『ソクラテスの思い出』『饗宴』『ソクラテスの弁明』。

- ③ アテネの裁判制度；紀元前 400 年ごろのアテネでは、30 歳以上の市民なら裁判官になれた。裁判官になることを希望した者の中からくじ引きで選ばれた 6 千人が、任期 1 年の役についた。この 6 千人の中から、裁判ごとにくじ引きで裁判官を選んだ。ソクラテスの裁判には、500 人が選ばれた。裁判は、即日結審され判決が決まる。まず有罪か無罪のどちらかが多数決で決まり、有罪になれば、原告の主張する刑と被告の主張する刑のどちらかを、また多数決で決める。
- ④ ステファヌス版；カッコ内の数字とアルファベットは、1578 年刊行の『ステファヌス (ステパヌス) 版』のプラトン全集のページ番号と段落番号を表す。数字はページ、段落はアルファベット。

### ■ 状況・主要な登場人物

被告ソクラテスが裁判にかけられ、告訴人から訴状が読み上げられる。本文は、訴状の読み上げのあとに続く、ソクラテスの弁明から始まる。

**被告人**…ソクラテス      **告訴人**…メレトス(作家)、アニュトス(手工者、政治家)、リュコン(弁論家)

**裁判官たち**                      **アテーナイ人諸君**…アテネの民衆たち

## ■ 内容

### ▼18B-18E 弁明には二通りある

- [1] 多年にわたって噂を撒き散らしてきた連中に対する弁明
- [2] 告訴人メレトスたちに対する弁明

#### [1] 19A-24B 多年にわたって噂を撒き散らしてきた連中に対する弁明

【連中の宣誓口述書】「ソクラテスは犯罪人である、天上地下のことを探求し、弱論を強弁する。」

【ソクラテスの弁明】 どうして中傷されるに至ったのか、その経緯を話す。

- 21E** カイレポンが「ソクラテスよりも誰か知恵のある者がいるかどうか」をデルポイの神に聞いたところ、神託を代弁する巫女が「誰もいない」と答えた。
- 21B** どうして自分をいちばん知恵のある者だということのわからなかったソクラテスは、知恵があると思われる者を訪ねることにした。
- ✓ 政治家…21C~21D
  - ✓ 作家…22B~22C
  - ✓ 手工者…22D
- 21D** ところが問答をしているうちに、実は知恵のある人物はそう思いこんでいるだけだということに気付いた。
- 22p** 「わたしは、知らないことは、知らないと思う、ただそれだけのことで、まさっているらしいのです。」  
知恵がないということを明らかにする仕事を続けた。
- 23C** 他の人もそれを真似した。
- 23D** 結果、問答を受けた人々は腹を立てたが、本当のことを言いたくないので、「空中や地下のこと」とか「神々を認めない」とか「弱論を強弁する」とか、学問をしている者についてよく言われるようなことを言うようになった。

#### [2] 24B-28A メレトスたちに対する弁明

【メレトスの宣誓口述書】「ソクラテスは犯罪人である、①青年に対して有害な破滅的影響を与え、②国家の認める神々を認めずに、別の新しい鬼神の類を祭る」

【ソクラテスの弁明】 ①②を一つずつ調べていく。

##### 《①について 24D-26A》

メレトスは、ソクラテス以外のアテナイ人のすべては立派なよい人間をつくっていると述べているが、もしそうだとすれば、それはとても幸福なこと。なぜなら、馬を善くすることができる人間が少数であるように、人間を善くすることができる人もごく少数であるはずだから。また、メレトスはソクラテスが故意に悪いことをしているというが、この歳になって、悪くすれば悪いことを受けとる危険があるということを知らないほど無知ではない。さらに、もし故意でないなら、裁判をせずとも個人的に会って、教え諭せばよかっただけだ。

##### 《②について 26B-28A》

メレトスは、ソクラテスが神々を全く認めていないと言う。しかし、鬼神に交渉のあることを認めることは、鬼神の存在を認めることである。だから、ソクラテスが鬼神の存在を認めていることは確かである。そして、鬼神とは、神の子である。ラバというものを馬とロバの間に認めながら、馬とロバの存在を信じないということがないように、鬼神を認めることは、神の存在を認めることだ。ゆえにメレトスの主張は自家撞着である。

## ▼28A-30C もうひとつの弁明

「人から中傷され、死刑にまで追いやられるようなことをしたという事実自体に恥じないのか。」

- 28B** □ことを行うに当たっては、それが正しい行いとなるか、不正の行いとなるか、すぐれた人のなすことであるか、悪しき人のなすことであるかという、ただこれだけのことを考え、生きるか死ぬかの危険は勘定に入れるべきではない。
- 28D** □死を勘定に入れるよりもまず、恥を知らなければならない。
- 29A** □今まで上官の命によって数々の死の危険を冒してきた。今神の命によって、知を愛し求めながら生きて往かなければならないことになっているのに、その場において死を恐れるとか何か他のものを恐れるとかして、命ぜられた持ち場を放棄するとしたら、それこそとんでもない間違いを犯したことになる。
- 死を知っている者は誰もいない。にも関わらず、死を恐れるのは、死を知っているふりをすることと同じだ。これに大して、不正をなすということが悪であるということは知っている。だから、ひよっとしたら善かもしれないものの方を避けるようなことは決してしない。
- 29B**
- 30B** □精神ができるだけすぐれたものになるように、随分気をつかわなければいけないのであって、それよりも先、もしくは同程度にでも、身体や金銭のことを気にしてはならない。

## ▼50p-31C すべては諸君のために

素性のよい大きな馬を目覚めさせるあぶのように、自分自身のことは一切かえりみず、全日一人一人を説得して回った。報酬を受け取らずそうしていたことは、私の貧乏が証明している。そのようなソクラテスを殺してしまうと、それはソクラテスの損害であるというよりも、むしろアテナイ人諸君の損害になる。

## ▼31C-33A どうして公として活動しなかったのか

鬼神のお告げが反対した。国家社会の中の多くの不正や違法をどこまでも妨害しようとするならば、人間誰も身を全うする者はない。本当に正義のために戦おうとする者は、私人としてあることが必要だ。

- 経験談** 1,十人をひとまとめに有罪にする裁判に一人だけ反対票を入れたら、告発されそうになった。  
2,できるだけ多くの人間を自分たちの犯行に連坐させるための連行の命令に背いた。

ソクラテスは公私どちらにおいても、正義に反することに対して譲歩したことはない。

## ▼33A-34B 誰の師にもなったことはない

貧富、老若男女問わずに、希望があれば話を聞かせていて、誰かの師となったことは一度もない。しかし、問答がおもしろいから人が集まる。もしも青年時代に害悪を吹き込まれたというなら、年が長じて気付く者もいるはずで、今この機会に告訴して仕返ししているはずだ。しかし、ソクラテスを昔からよく知る人は皆、メレトスの言うことが虚偽であり、ソクラテスの言うことが真実であることを知っているの、助けにきてくれている。

**仲間たち** クリトーン、アイスキネース、エピゲネース、プラトーン、アポドロース

## ▼34C-35D なぜ懇願しないのか

妻や三人の息子もいるのに、裁判にかけられた他の人のように哀訴嘆願しないのは、何らかの徳において傑出していると思われるはずのソクラテスがそんなことをするのは醜態だから。また、裁判官は、えこひいきをするためではなく、法律に従って正邪を判別するためにある。せつかく誓いをたてているのに、もし頼み込んで無理をさせるとすれば、それは明らかに神の存在を信じないように諸君を教えたことになる。

有罪か無罪かの投票が行われ、30票差で有罪が決定する。

**36A** ソクラテスは、もっと大きな差になるものと思っていたと、投票結果に対して驚く。

- 36D** ソクラテスが申出る刑量は、「市の迎賓館において給食を受けること」。善良なソクラテスに適切な評価がなされるのなら、それはそうした善いものではなければならないから。
- 70p** 何びとにも不正を加えることはしていないのだから、自分自身について、自分の方から何らかの害悪を受けるのが当然であると言って、自分自身に不正を加えようとするのは、思いもよらぬこと。いったい何を恐れて、そんなことをしなければならないのか。
- 72p** 「どうか沈黙を守っておとなしく生きろ」と言われたとしても、そうすることは神に対する不服従であるし、毎日談論するというのが人間にとっては最大の善だから、吟味をやめることはない。

#### ▼38C-39D 死刑の票を入れた人へ

- 74p** ソクラテスの年齢は、生を既に遠くまで来ていて、死に近づいているから、死刑判決を下さなくてもその結果がひとりでに得られただろうに。
- 39A** 裁判の場合にしても、戦争の場合でも、死をまぬがれるためには何でもやるような工夫は、なすべきものではない。
- 39B** 「わたしはあなたがたから、死の刑罰を負わされて、この場を立ち去る。」  
「諸君は真実というものから、凶悪と不正の刑を負わされて、ここから出ていく。」
- 39C** 生活の吟味を受けることから解放されたいと思い死刑にしたのだろうが、もっと多くの人が諸君を吟味にかけることになるだろう。
- 39D** 他人を押さえつけるよりも、自分自身を、できるだけ善い人になるようにするほうが、はるかに立派で、ずっと容易なやり方なのだ。

#### ▼39E-41D 無罪の票を入れた人へ

- 39C** いつも当を得ていないときに反対する神のお告げがなかったことから、今回の出来事はソクラテスにとっては善いことのようなのである。  
死ぬということは、①全くの無か、②住居を移すようなことである。もし①ならば、夢も見ないくらいに熟
- 39D** 睡した夜のようなもので、これは儲けものである。②ならば、不正の判決を受けて殺された人に出会える。
- 41C** また、かの有名な人々と、問答し、親しく交わり、吟味することができ、それははかり知れない幸福だ。
- 41D** 善き人には、生きているときも、死んでからも、悪しきことは一つもない。もう死んで、面倒から解放されたほうが、わたしのためにはむしろよかったのだ。

#### ▼41E メレトスたちへの遺言

もし、自分の息子たちが成人して、自己自身をよくすることよりも金銭その他のことを気にかけているようであったら、自分が諸君たちを苦しめていたのと同じやり方で苦しめて、仕返しをしてくれ。

しかし、もう終わりにしよう、時刻だからね。もう行かなければならない。わたしはこれから死ぬために、諸君はこれから生きるために。しかしわれわれの行く手に待っているものは、どちらがよいのか、誰にもはっきり分からないのだ、神でなければ。

## 『クリトン』

### ■ 基本知識

ソクラテスと対話した、あるいはソクラテスについて語っている人が題名になっていることが多いので、副題を付けられることがある。『クリトン』の副題は、「行動はいかにあるべきかということについて」。

### ■ 状況

ソクラテスの死刑判決が下って、いよいよ刑が執行されるのも目前となった日、クリトンが脱獄を勧めにくる。

### ■ 内容

#### ▼43A-44B 導入

ソクラテスが悠長に起きる。クリトンが、もうすぐ船(130p 58BC)が帰って、死刑執行がなされるだろうことを告げる。ソクラテスに死の恐怖は全く感じられない。会話からは、二人の親密さが伺える。

#### ▼44B-46A クリトンの説得

クリトンの主張は、哲学よりも、実際的な面に向けられている。

1. 二度と見つけることの決してないような知人を失う。
2. 大多数の人たちに、その気になれば救えた友人を救わず、金銭を大事にしたと思われてしまう。
3. 助かることができるのに自分自身を見捨てることは正しいことではない。
4. 息子たちを扶養し、教育するという苦労と一緒にやらなければならないのに、安易な途を選ぼうとしている。
5. こうなったのは、ソクラテスにとってもクリトンたちにとっても、何か無能であり、男らしさを欠いたためだ。そのうえ、条件が揃っている脱獄のチャンスを見逃せば、恥辱である。
6. 救ってくれようとする者はいる。お金の準備もある。密告者は安く買収できる。外国にも助けてくれる人がいる。

#### ▼46B-54E ソクラテスの説得

原則：よく検討した上で、これが最上だというのが明らかにしなければ、他にどんなものがあったとしても、それには従わない。

#### 《2.に対する答え 46D-48A》

- 大衆の思わくというものは、思慮ある人の有用なものは尊重しなければならないけれども、思慮のない人の有害なものはその必要がない。
- 体育の練習をしているときには、すべての人の賞賛や非難や思いなしよりも、ただ一人の医者や体育家だけの思いなしに注意を払うべきである。身体が害悪によって破壊されると、生きがいのある生き方ができなくなる。
- 正邪美醜善悪に関しても、多数の者どものよりも、正不正についてよく知っている人が一人でもいるならばその人に、又は真理そのものが言うことに、従うべきである。(魂は)身体よりもっと貴重なものなので、(破壊されると、生きるに値しなくなる。)

大切にしなければならないのは、ただ生きるということではなくて、よく生きるということなのだ。  
「よく」というのは、「美しく」とか「正しい」というのと同じ。

《アテナイ人の許しを得ないでここから出ていこうとすることが、正しいことなのか不正なことなのか》

- 48C クリトンの主張は、多数の考えることかもしれない。
- 48D クリトンは、ソクラテスの言うことに対して反対することがあれば言えがいい。
- 49A 今まで話し合ってきたように、どんな場合でも、故意に不正を行ってはならない。
- 49B → たとえ不正な目にあったとしても、不正でもって仕返しをするということは許されない。
- 49D 害悪を受けても、仕返しによって、人に害悪を与えるような自衛はやはり不当である。
- 50A 国民の承諾を得ないで、ここから出ていくとするならば、何ものかに害悪を与えていることになる。  
擬人化された国法、国家共同体

《不正に対する報復は、不正》

- 50D-50E 法律は、市民の生みの親であり、育ての親である。
- 50E-51A 親と子、主人と奴隷、祖国や国法と市民の間には、『正しさの平等』は存在しない。
- 51B 祖国は父母や祖先よりも聖なるもの。
- 51C したがって、国家と祖国が命ずることは、何でもしなければならない。そうでなければ、説得しなければならない。暴力を加えるというようなことは、神の許したまわぬところ。

《国法を破ることは不正》

- 50C 国家が下す判決には従うということが約束されていた。
- 49E 人が誰かに何かの同意を与えたとするならば、それが正しいものである限り、それをなすべきである。
- 52E 正しい同意の条件とは、  
[1] 強制によるものでない  
[2] だまされた結果でない  
[3] 短時間のうちに考えをきめることを余儀なくされたものではない
- 51D ソクラテスは、国外退去の自由が認められていたのに、アテネにいた。
- 52B-52C しかも、仕方なくではなく、気に入っていたからアテネにいた。その証拠もある。→ [1]
- 52E 70年間に、この国の法律習慣についてよく考えることができたはずだ。→ [2][3]
- 52D ソクラテスは、この国の国民として生活して行くということを、言葉のうえでないにしても、行動によって同意している。また、その同意は正しいものであるから、国法を破ることは不正である。

《6.(国外に逃げる)に対する答え 53B-53E》

国法を破壊するような者なら、若い者や考えのない者を破滅に導くにきまっていると考えられるから、国制の的として迎え入れられ、すべての人の機嫌をうかがいながら奴隷の役をして生きて行くことになるだろう。

《4.に対する答え 54A-54B3》

ソクラテスの知人が少しでもましなところがあるのなら、ソクラテスがあつ世に旅立っても面倒は見てくれる。

いかなることも、正というものをさしおいて、それ以上に重く見るようなことをしてはいけない。

年号 紀元前	できごと ※一部で、意見が分かれる部分があります。
490	マラトンの戦い。ギリシア連合軍（アテネ軍はミルチアデスに率いられ）、ペルシア軍を破る。
483	アテネ、ラウリオン銀山を経営。
480	テルモピレーの戦い。スパルタ王レオニダス壮絶な戦死。サラミス海戦。アテネを中心とするギリシア艦隊、ペルシア軍を破る。
479	プラタイアの戦い。ミカレ沖海戦。ギリシア連合軍勝利。ペルシア軍撤退。
477	デロス同盟結成。アテネを中心に海岸都市が同盟を結成。アテネのギリシア覇権が確立する。
470	ソクラテス生まれる。父は石工・彫刻家だったとされるソプロニスコス。母は助産婦のピナレテ。中流の家庭であったと推察される。（469説もあり）
468	エウリメドンの戦い、キモン勝利。
463	アテネの高等法院の権力失墜。アテネの民主化。
460	貴族派キモン、陶片追放にあう。
454	デロス同盟の金庫をアテネに移す。アテネの権力増す。
450	アルキピアデス生まれる。
449	アテネ海軍、サラミスでペルシア軍を破る。
448	カリアスの平和。アテネ、ペルシアと和約。ペルシアはエーゲ海沿岸から撤退。
447	コロネイアの戦い。アルキピアデスの父戦死。パルテノンの建築始まる。
445	アリストファネス生まれる。
443	ペリクレス時代始まる。
438	パルテノン神殿完成。
435	アクチオンの戦い。
432	ポテイダイア、アテネに反旗をひるがえす。ソクラテス(37-38)も出征。
431	ペロポネソス戦争始まる。全ギリシャが、アテネを中心とするデロス同盟側とスパルタ中心のペロポネソス同盟側に分かれて戦う。
430	アテネで疾病が流行。
429	ポテイダイア降伏。ソクラテス帰還。ペリクレス没。
427	プラトン生まれる。
424	ニキアスのキュテラ占領。デリオンでアテネ軍敗退。ソクラテス、ラクス、ともに重装歩兵として奮戦。
423	アリストファネスの『雲』上演される。
422	ソクラテス、アムピポリスへ出陣。
421	ニキアスの平和。アテネとスパルタ、平和条約締結。
420	アガトン、悲劇作品が受賞。「饗宴」開かれる。
418	マンチネイアの戦い。将軍ラクス戦死。

415	シチリアへ大遠征軍を派遣。アルキピアデス、スパルタへ亡命。
413	シチリア派遣軍壊滅。ニキアス戦死。
409	ジオン生まれる。
408	アルキピアデス、アテネに帰還
407	アルキピアデス、失脚。
406	アルギヌサイ島沖海戦。エウリピデス没。ソクラテス評議員の議長となる。プラトン、ソクラテスの弟子となる。
405	アイゴスポタイモスの戦い。アテネ軍大敗北。ディオニュシオス1世、シラクサの僭主となる。
404	ペロポネソス戦争、アテネの降伏で終結。スパルタ側勝利。アテネでは、三十人政治始まる。プラトンのおじのカルミデスと、父のいとこのクリティアス4世が参加。この二人はソクラテスの弟子ともみられる。
403	民主化革命。三十人政治倒れる。大赦令。
400	クセノポン率いるギリシア軍「一万人の退却」アナバシス。
399	ソクラテス裁判。ソクラテスの死刑執行される。プラトン、メガラへ脱出。
396	スパルタ王アゲシラオス、アジア出兵。クセノポン従軍。
392	コリントス戦争始まる。

#### 参考文献

- 『プラトンのアカデメイア—その哲学と教育についての研究—』第一章、川島清吉、公論社、昭和52年
- 『ソクラテスの死』ロマーノ・グルディアーニ、山村直資訳、法政大学出版局、1968年
- 『規範と意味—ソクラテスと現代—』三嶋輝夫、東海大学出版会、2000年
- 「ギリシャ哲学への招待状」<http://philos.fc2web.com/>